

骨粗鬆症と運動器疾患

わが国では人口の高齢化に伴って骨粗鬆症患者が増加しており、最近の疫学調査では日本全体で1,500万人を超える患者が存在すると推定されている。アメリカ国立衛生研究所（NIH）コンセンサスによると、骨粗鬆症は「骨強度の低下を特徴とし、骨折のリスクが増大した骨格疾患」と定義されている。

骨組織は、身体の支持、内臓の保護、造血の場としての役割を担うことが知られており、身体活動にとっても重要な臓器である。また骨組織は関節を形成し、付着する筋によって駆動されることから、動物の運動にとっても必要不可欠な臓器である。「運動器」は身体運動に関わる骨、関節、軟骨、筋肉、靱帯、腱、神経などの総称であるが、個々が独立に働いているのではなく、お互いに密な連携をとりながら機能を果たすことが知られている。このようなことから、本来は骨組織の疾患である骨粗鬆症と、変形性関節症をはじめとした様々な運動器疾患との関係が近年注目されている。

本特集では骨系統疾患、関節リウマチ、変形性関節症、サルコペニア・フレイル、スポーツ障害、股関節疾患、後縦靱帯骨化症、そして脊髄損傷といった様々な運動器疾患と骨粗鬆症との関係について、第一線でご活躍の先生方にご執筆いただいた。本特集が皆様の骨粗鬆症に対する認識を変えるきっかけになれば幸いである。

（田中 栄）